

の開申以来、次々と表面化してくる問題が、明照院連枝暢道師(第24世大谷光暢法主の四男)による「大谷の里」にからむ手形乱発事件など、度々その名前が出てくる頃から、大谷家と本願寺財産をめぐる社会的な事件としての様相を呈し、世間のこの問題に対する認

識はその方向へと向いていった。4月15日「宗門危機突破全国代表者決起集会」が開かれたその年、1976(昭和51)年10月刊行『教化研究』77号(特集・教団を考える)の「闘争堅固」と題された、宮城額師の巻頭文に「7月3、4日号の『中外日報』誌に掲載されている元立教大学総長、松下正寿氏の『宗門外から見た大谷派問題』という一文、とくにその中で、『宗教者のくせにあるな争いをして、と思うのが世間一般の常識であることは認めるが、私はこの常識を、必ずしも正しいとは思えない。というよりは、むしろ宗教家だから甘く考え、争うべきときに争わなかったところに、今回の紛争が悪化した根本の原因があるのではないか』という言葉は、我々の多くが見とおしている病原をすどくつかれたものとして、厳しい。

もちろん、この言葉は、今回の我々の紛争にたいして一種の支持があたえられたというようなことでは、決してない。逆に、まさしく我々の紛争にたいして一種の支持があたえられたというようなことでは、決してない。逆に、まさしく

「ある有名な弁護士の方に、今回の紛争についてのご意見を聞いたことがある。紛争の経緯・現状を話し終わったとき、その人は、つきはなすようなきびしさで言いきられた。『それじゃ、まあどちらも一緒に地獄に堕ちてもらうんですな』と、いつも問題を徹底して掘りおこし、明確にすることをせずにきた。最後のところでは、互いに許してしまい、あいまいにしてしまう。しかも仕末の悪いことには、それを宗教家の美点であるかのごとくに思いこんでいて、それが今日まで、結果的に、社会に大きな罪を作ってきたか、すこしも反省していない、とその弁護士は容赦のない言葉をあびせてこられた。松下氏の文章を読んだとき、私は、その弁護士のことを思いかえしていた。」と書き出されていた。(つづく)



若き日の寺川俊昭氏

く我々の甘さ、ずるさこそが紛争悪化の原因である、というきびしい糾弾の言葉である」

寺川俊昭師が「念仏の僧伽を求めて」の中で、非常に深い感銘を受けた「ある先輩の言葉」として紹介された言葉である。また、「唯円、運如上人、清沢満之の三人の名が表すものは、一貫して数々の精神の系譜である」とし「真宗同朋会運動は、この数々の心から生まれ、同朋会運動という形を求め展開していった」と指摘している。真宗同朋会運動は、教団の自己反省のなかで、宗祖の信心に帰るといふ願いをもち、個の自覚の上に念仏者として立ち上がったといふ信仰復興運動であった。その運動が宗政の場において、それを推し進めようとする革新派により直道会という会派を形成し、内局の施策としてうち出され



一同、新しい御影堂の姿に感動し、来年の御遠忌に再び参拝したいと口々に申しておりました。

▼一日参拝 4月▲  
4/7  
第9組 陽願寺

25名



法務員同士、座談会を中心にたくさん語り合いました。

▼奉仕団 5月▲  
5/25〜26  
第4組 極楽寺法務員奉仕団 7名

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌  
お待ち受け総上山

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」  
教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

# 教化本部通信 【第58回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう  
を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

しんらんweb 検索

真宗同朋会運動50年に向けた運動の再検証。開申以降の宗政による革新派と保守派の争いを始めとする教団問題における、宮城額師氏が指摘した問題の本質について尋ねる。また「点描」は、北海道「開教」百年の最終回。北海道教区において「開拓・開教」の歴史は重い。その節目ごとに用いられた錦絵と、現在の学びについて。

## 真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 歩み(八)

### 教団問題から見る真宗同朋会運動 (4)

教化本部 古畑 誠幸

「僕は同朋会運動は、懺悔―反省といってもよろしいですね―だと理解している。懺悔だというのは、一つは自分の宗教生活が、本当に親鸞聖人のお心に適うものであったのか、本当に真宗の教えを受けている者であるといえるものであったのかを、深く省みることであり、もう一つは、寺の住職として、門徒の人に対して本当に親鸞聖人のご精神を、ご信心を、間違ひなく語って来たであろうか。こういうことについての深い懺悔、これまでの真宗の僧侶は、本当の宗祖のご精神を間違ひなく学び取り、語って来たのだろうか。どこか大きな誤り、過ちを犯して来たのではないか。そういう懺悔の運動だと理解している」